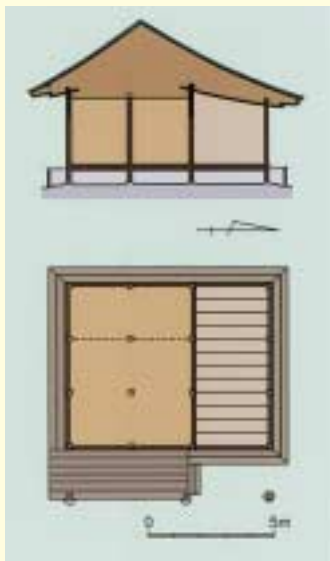




▲ 発掘された建物柱跡穴と庵室の復元



▲ 庵室の復元図

長法寺は、勝龍寺や海印寺のように平安時代に創建された寺院の名称がそのまま地名になったところです。西山の急斜面を背に、集落から離れた山中の境内には、平安時代・鎌倉時代・室町時代の仏像や石造物が伝えられています。中でも平安時代の仏画として著名な『絹本着色釈迦金棺出現図』（国宝）は、かつて長法寺が所蔵していたものです。

さて、平成元年の本堂改築に伴う発掘調査では、現本堂に関わる江戸時代の礎石群と、平安時代の礎石と礎石痕を確認しました。このうち平安時代の建物は、柱間が東西3間、南北3間ですが、柱間寸法は東西が7尺等間の21尺（約6・4m）、南北は南から8尺、8尺、10尺で北端間が長くなり26尺（約7・9m）となっています。この建物を復元された関西大学の永井規男氏は、柱間寸法が異なる構造と、瓦が乏しい状況を踏まえて、発掘された建物は遁世僧や隠遁者が住んだ庵室遺構と想定されました。同様の建物は残っていませんが、『融通念仏縁起』にみえる大原の良忍の庵室や、『法然上人絵伝』における黒谷の法然の庵室などがこれに近い遺構と考えられています。

庵室の暮らしを物語る土器には、土師器の皿（素焼きのカワラケ）、瓦器（内外面を黒く燻した土器）の皿、椀、鍋、釜、須恵器の捏ね鉢などの日常雑器があります。庵室遺構の周辺には、山の斜面を造成した平たん面から鎌倉時代を中とする遺跡が確認されており、寺院関連の施設が広がるものと考えられています。